

清元 築地明石町

作詞 川口松太郎・作曲 清元 栄三郎・作舞 西川鯉三郎

鎗木清方の名作で近年 44 年ぶりに公開された「築地明石町」—黒い羽織を着た女性が旧外国人居留地の明石町にたたずむ姿を描いている—を舞踊化したもので師匠の晩年の作品です。

明治時代への、明石町への寂寥感や哀惜の念が描かれているのだと思いますが、「心のうちの思い川流れて何処へ行くのやら過ぎし春の夢ならで」と昔を懐かしみ、「わが黒髪もかえらざる昔の色を留めかね」と重ねた歳に対する寂しさは今の時代を生きる私、又客席の皆様とも共有できる気持ちだと思いますので、両方の気持ちを重ね合わせて踊らせていただきます。

夕がすみ 築地の河岸に立ち込める 薄きとぼりの晴れやらぬ 心のうちの思  
い川 流れて何処へ行くのやら 過ぎし昔の夢ならで 変わり果てたるわが身  
かな まだその頃は左袂 鬢のほつれをかきあぐれば さめざめさつと春時雨  
又もや濡るる袖とそで 初手は浮気で三味線を弾けば 嬉しや春告げ鳥の  
ホーホケキョと啼いた朝 「別れが辛さにいっそもう」と嘆く手を 優しく  
胸に抱きしめて 嬉し涙に泣きました  
花が咲いたぞ桜の花が 花を見ずして何の春 願わくば花の下にて我死なん

西行法師の歌ならで 今はわが身が情けなや 遠い旅路もなんのその

やがては帰る花の下 何故に待てぬと叱られて 落つる涙を盃に受けて

飲み合う嬉しさ怖さ 昨日今日と思いに 早くも月日重ねたり

わが黒髪もかえらざる昔の色を留めかね 舞の師匠にほそぼそと

面影人を待ちわびて 又もやかかる霞まく 空にほんのり夕月夜

やがては船も霞の底へ わびしく汽笛吹きならし ほのぼの消えて

残る笛の音



2024年3月3日 日本橋劇場



初代 西川鯉